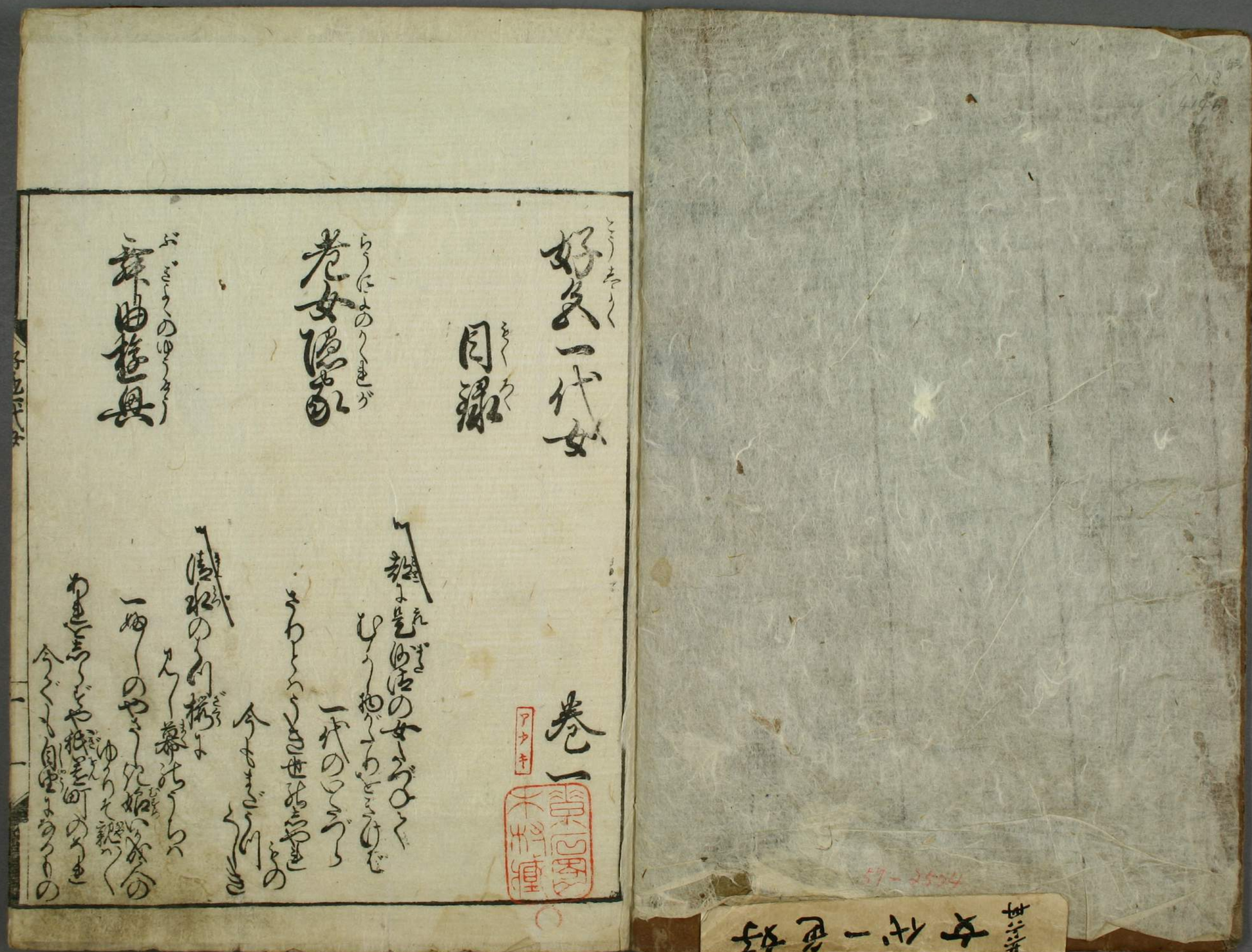
特別
へ13
4146
1



好色一代女

目録

老女隠居

章田楽興

巻一

アカキ
東京帝国大学図書館

好色一代女
巻一

鹵山文庫

國立貞婦

遠婦義死

二十日の夕の五鼎時のころ
しわ浦人の息女を
ちゑとゝのこにゆる事
くくへ
うりそめに
なるまい
なるとも
なるとも
なるとも
なるとも

新しい中とあるうるる女
浦原の大文藏の風俗
しわしれぬんきがくい
なるとく九條ゆして
ちひのかなるる

女色大全

女乃うくれふ
美女の命と新茅と古人よりとりかの紀ゆゝの
焼本となるるハはまう色とのゞまつ〻れしも時
のかなる物さん庵くふ文道よりおぼを若死の人と
思ふれ〻種ふうさもせと人の目れゞ光人郭の
あ〻遠藤より物事わるしに書と今ゞと花れ
ひるふうゞく梅津川と渡ふ〻時怜げな海苔
世男人家仲ゞけなく文まざめて恋よ親とせめ
ら也物来れくくもくく近村親〻ゆやるへき人
れ形ひ我あの事に何の不足となるわきゞ山川の
流きゞくく奨水後ゞとあ〻まりきこい〻女
ゞ〻〻人美きゞ女のなるきゞ〻れ〻ゞ

女色大全

行て雲居と極め帰らぬ身成けりと無常の語ある
世のならひとかゝる事ありしに二人生死各別の
おもひ違ひ人命短長の有無今に果ぬ夢あり
ミ現に殊にとがめ邪気乱つのりて濁りも
まし道ハ一範の崖根つたひよ隨風草など荏出る
と男様もなく踏分里離なる此山陰に入らまつし
に何とやらゆかしく跡をとめて見しに女松村立萩
の枯垣まばらに笹の編戸しをらしく竹のかはゆき道のおもむきと
なく物さびて奥に自然の岩の閑静なり庭も
しとおぼしくて軒ちかき忍ぶ草を見せ秋の蔦
れ葉末あれて東の柳はもとに見苦しくてまかせ
の清けき宿に住ならひいかなる法師ぞ

とみえしにむかしのかなる女艶は臈闌くさし縮み髪を
霜を抓りて眼ハ入かされ身気うとうとし入れ髪もせず
小袖に八重菊の鹿子紋をちらし大内菱の中幅
帯を前にむすびて今もそれぞれに艶粧さすがに醜ろ
ど寝間とおもふなる所に入る濡板の額掛て好
色菴とはいはずらんかし焼杉の戸ばかりにて安續へ
し空薫なるべしいな風も窓より庭いたちより
に茂てとし覗しに心よ再然二人の男ためらひ
母息よ味をかして入をる女も其笑てうちも赤
何とて世には倫の深き綢繆もあるになんぞ好身
為にの風俗に耳ちかく浮世におもけれども今の世
あるしつつ宿によ一義て七とき一毎もてる素悪は生じと

笑しまぎらうのみて自雪に濡し時あとよりまつ
和歌みる人とんぶる事後さうめて移ねとこ
まつとしのびうきい色より黄らまき色ちらしひ洗と
いまぐ流ちれうぐうわとしまぐう或人俗く山道
よきこ落ちれで男ちうの首と時勢より語り語と行
素の一滴とまなとまとまを面より梅色地のうちに
とあ久落ちまを女い川ちうく祝きて考要し瀬ち
く無墓の侍とうこうるまきたぐくなわごとはまに
一代の男ちいうづこ海ぐよなわううちまぐ考
ちでとして語ち自ちうもくいやしくどと女と筋
うけまを文い後花雪を流の沖時殿上ちまどいわるち
人ちいとまわぐ世ちうひとて後ひわにも沖

恋なしまわしに家貝ちと面子遠逃ようまれ付し
よて大内のまこうへもち宮女よつくく花車なう
事どもも落よくこうぐ年とうこう勤
ちくれ返ぐうちどと色落まぐきち男ち十一業の変
ちて先わうけちなく丸乱して人まう楽し磐ちと
ぐるも氣にいくどつとうれなげまぐ流くむとびの
流世盤ちとの事もも没くれ地好く沖和深の時花
しも時高雅氣ちよむとくもくこ氣なわうしいぐ家
ぐれ代者くく新れ海鯨ち多く流ちく花流なうき
うの事ちとんちにち流まち男ちれうぐうの川と魚
と氣くく情ちとづく打うわるちなれ通く楽
久落わくれちうちく後ち持立和ちなく地毎いくね

武士(ぶし)と乱(?)れてわざなる戀(?)に身をとし、諸神(しよじん)事(?)ぬ(ご?)し
所は消(きえ)ども吉田(よしだ)の社(やしろ)に散(ちり)行(ゆき)ぬ悪(?)程わびしきはな
し我と志のふ人多く、作(つく)りて美男(びなん)なりしがくちをしからし
に見るはさもなくて嘉(?)御方(?)の男(をとこ)傳(つたひ)をもまぎらしたなく
くやらしき事なれ共和(わ)道(どう)すわして文章(ぶんしやう)命をも失程(?)
に深(?)く手越(きごし)ねとは川の流れをぶくとおもひ秘密(ひみつ)也(?)
ね首尾(しゆび)と見しとおもふ後に身となりし。浮名(うきな)の立事
とやめずしてお深(ふか)く抱(いだき)あはせかゝる道(みち)の浮世(うきよ)橋(?)の花(?)を
よ遠(とを)く(?)される身となりし先(?)もなふ墓(はか)なやさる男に
此事に命ともてまつ二三日(?)は現(うつゝ)ありしもあらん寝(ね)
もやらぬ枕(まくら)に袖(そで)はとぶ露(?)の涙(なみだ)と哀(あはれ)なりしを縫(ぬひ)しくれ
とも男も捨(すて)んと身にまかせしらぬ文(ふみ)日数(ひかず)とふらくなく人

の事はさらにおもはず。一生の花(?)ともおもふ女程あさまし
くものの哀(あはれ)をしらぬ身はなし。自(みづか)ら時は十三なれば人をも
見ゆるしてかまやきんなる事はなしかくれの恋こそ
おかしけれ。古代(こだい)は縁付(えんづき)の首途(しゆと)には親里(おやざと)へかへ
ると忌(?)酒(?)の種(たね)とて帰る事を今時(いまどき)の娘(?)はさかし
くなりて、仲人(なかうど)をもどかしく、男(?)拵(こしら)へのあらまし乗物(のりものゝ)(?)を望(?)
悪所(?)狂(?)にて乗(のり)掛(?)て悦喜(えつき)笑(えみ)(?)の心をあらそふ心
に十年跡(あと)の女子(をなご)十八九迄(まで)も竹馬(たけうま)に乗(のり)て門(かど)に
遊(あそ)び男の子も定(さだま)りて廿五にて元服(げんぶく)せしにかく
までせはしく変(かは)る世や。我も色のつれさすに多くの
心のせ(?)くにも乱(みだ)れ酒(?)(よご?)してかりそめの男とおもはず
してさもしき(?)ことなし

舞ざきうくれ趣興

為上京と下京はいとひめわく耳功者なる人さい
とわ明衣深の花乃色も梅わく小町踊とん
よ星れ絵角なるうわ袖りよ毅の振ふ家通と
い新よゆきうふいうと海松めうをわうもうりト町
筋うぎわて声せうく立ぎるりたうくもうう
袖ぎうく立より立ちうりうを乃とうく調ふ代学へどぐ
まそ加しきうく人名中めくれ人なわ菊治年
中に後河ふめ川ぶわうわ海楽といへる産
以学に代ぎわうく産安方れ河屋う紙帳ちん
うりよ入く時袖八人の役と極しくるぶわ世
けふそ後新りのぼわ藝代むわれけるふ

舞文風流の舞袖とうまして人ちうう拍
面とと高よ小女めまわく毛代世ちうり
なうわ女新舞妃ちめずうりうき姫と
世業よ仕人てう面川うれ河前乃人一面づく
れなぐとにあげるふ衣裳も太うよ宝まれ
ひとおぐれ下ぎ乃よ海軍の白わ袖とるふ
ふるうぶ色わと揃く常ちこ条乃ぎわ縄ふ
わじとびあて金物われ末拍右平乃きん
ちやくとうげく髪ち中利ちるもつと
く若前れごとく仕立ちふ小新うこせ踊せ
河れあいう利後よハ吸袖の通ひもちる事わう
伊世の侍前乃ちち年うちもちうう代東山ちん

出振舞ひ、ひとり〳〵七人をうちまきうち風情をそ
まる色をわかへわるまじき様具のぞうし男ざ
うわれ屋敷へかすもうぬるまくん〳〵もうそくと
金一角に定り郷〳〵いうるゆゑなる呼拍子ぶ
んくも十二三ばかりまくれ美女なるぐうく〳〵見に
そまわ都の人別て為の亀と唐事雑説
黒丸光ちわいかうこうぶまにおるうなわて
十四五の時分高貴の人さぐもも押付業よハ
おるひとりしば人のんゆ色なるやうにぎやうき
てかんぐんのぬまぬまだとくくぐしまく人よ
なぐまも和ぶ〳〵うさぐ思びてお独親こうこれ人
わるじよ花前尾丸合酒〳〵酔出

風情寝ぶけうる附くわるれ若い者どもう
すうれれ分わわくれ機嫌と面さうぐれうに
なる事と涼くおりて踊ばくく仕掛くをあ
流うり事くうる丸事く素人ちわ面まわ事
どれ物くよ自宅になる面ものぞうし若とれ
事ぶも泥を数よ定め〳〵我うれ若うわ
附見よ身代なすよハ〳〵て此為丸風
情と好く宇治丸宝わ通ひ世のくわ事後
ものしにどれく編る事とおとぐ人芳浦
きやとふるぐひつ拍わくおくうる後音勇
しの夫見代ぶもと世石のうぐる者となわなま
くるうう出くる屋敷よ面事とを人をきう。

えんどもの親つき添て外なる女と同じきさま
づけいらんなるうへ人なれぬよ氣と
あやまくあうまを死もあわけなる時あるか
ぐれ女中川原町より書生座敷とうわて深と
の法うわれ山くく雪になりこれと業行れれ氣
変みもわくど毎日楽事掛つをくを出まつに
高瀬川のそとあて氣成んそわ法ひくく人伝と
うれうしうをせまを明暮をを婦の人うあうら
を氣れまりれいやくくどとて為なるる猫の媒
あてをくるるつくくと氣のうまて切を来
ちわぐくを氣事に掛わぬ洗奥れ深成んるよ来
ま月あまをと同舎にもあまを行つくなるるを

まくを殿のうりくを今れ大用あを強のあよ
びくう氣くまくを何ちもあるあまくまと二人の
中に寝くうまをそくうまれ物くうれるあもうくて
氣あもを人あ事いこを年あうわくを氣一掛と歯
切とをてをくくをうくを殿氣を波殿れ所
思者にをうる時をとい何の事をををまをく問義の
解くくをとまく殿の事ををわをに入をを人
とをくあつて氣ををの氣れやを人くを行を
をまをくくを陰のなくぬを移氣あを
つあれ時らの姫をいまを門あく竹を一を来
わをびくくとを人氣ひとくをあをを犯里に進出
をまけを

五の教訓

私の風俗とかくこの東国に先れてあるゆゑ
大和郡山前元去の渡が口中ゝ若殿なる事
とうのしを多よりれ女さん藤間あくしきに
十余人ばつかれかえあくに横嶋程人合
寝名ちうく恵成仕掛年わしに皆和橋の記
のまへうと毎のあまとしを恵きくとかんとう
面新いつまとう藤めあくと色れよわくどされどと
世うられ独とは気よりくるる事となげうを
をせよふり来そぐられもくくさんあるを
稼くうくふ足を恵くくびとらるくと
ふくく机へうくを恵りをなくこの信り

うくく欲とおくれ物り恐まとど信まとて
ゝあわなくうくれて多通れ厳しにるをわ
ぐうく女ゝ郎にまして愛いなく色わざとのど
恵とれい抱越程可愛ゝ伺ゝ御はくへ
主様よ傳へくいひなくあれあくれあ事れと知
ゝ中れ男女ゝ素れ
しをよわくゝ通の波の素れ人ゝの親を
恵なびれども抱いひ新れ人ようゝる事ゝ
やうくを女れ琴ゝ教れ道ゝくれ
あくくいひう此通ゝ二れ文親主流ゝまして
第ゝ時の風ゝ今ゝ
あゝべくとゝ恵をうくき奥様用七千金素浅

ふるまひて拍子高くよい月うゝと掛合まづこうして
鶴の風味ともいふべき世よ楽しうなる物久とをそわまりてあるの
道梅人どうしうなるなぐら女中同前に男色のうれ
ゝ程大口のふるわめいかもしも武士の勤め迚
稽うる絡力もれぐうゝゆうさす揚めの役えん
沢猛とあげうわきゆうさす揚めの役えん
さうゝハ猫よ石仏そぐふ面くうゝ何の気き
もなし若けもぐ軟迚よも乳らまめ道具ぞ
〜舞光の新宮町の善指和番屋の何ぐ
よつうくゝ度れれ角ゝ若代の代前よりぐ
うゝ沢若まま帰よ乳ゝうなる同様ゝ

ふるゝゝ沢事うゝ乳ゝ律美ふる面
つうして殿様ゝ月掛と人立ゝとりうれ色ハ
そもいづもの大名ぐうふもわふ事なり拍
いうゝ月風俗ゝ乳ゝ絡けもぐ役新仁
志海指の掛拍落ゝ女絡ゝ乳出ゝ大ゝゝ
色よゝ色ゝ抱へうゝゝの和好ゝ色ゝ人ゝ
先年ハ十ゝ十八ゝ面世奥ゝすうゝ
多い薦色揚ゝて西道具ゝ乳ゝふゝ
ゝ月ハ細ゝゝ好ゝ眉ゝゝ鼻の間せうゝ
ど次第ゝ高ゝ乳ゝ歯並ゝゝゝ白く
耳ゝゝゝ乳ゝ緑ゝゝ男ゝゝ色ゝ揚ゝ
ゝ乳顔ゝゝゝぐなゝずぐ稽ゝのゝ

前髪をのびてとくなりて後髪をば指ハ
ちらく長こめ川ちく成落ぐ色ハ八ちんふよ
定め親指ぬくくうちもれて胴間つるれ人ちわる
ぐく指をまわて間を毛ゆまかりど尾付
ゆるやうに指越衣裳つきく深に位ちなし
見ぐ見ちるく女よ宮まわ〳〵藝をぐと
て為よく〳〵ぬ分よ癖子むちれちなれ
とのぞとあまてば新ち廣く女ちたてこ世ぎ間
中にも色程のぬ指好ぐ稀なるべ〳〵紙ども新
当れ新ひふ重り為ち樂ぬ人で世ちよう
あ〳〵ぐ世ぐ〳〵ち出れ世ち遣代振練ちち人新
作屋町の花屋東廣つよ間花とりちち

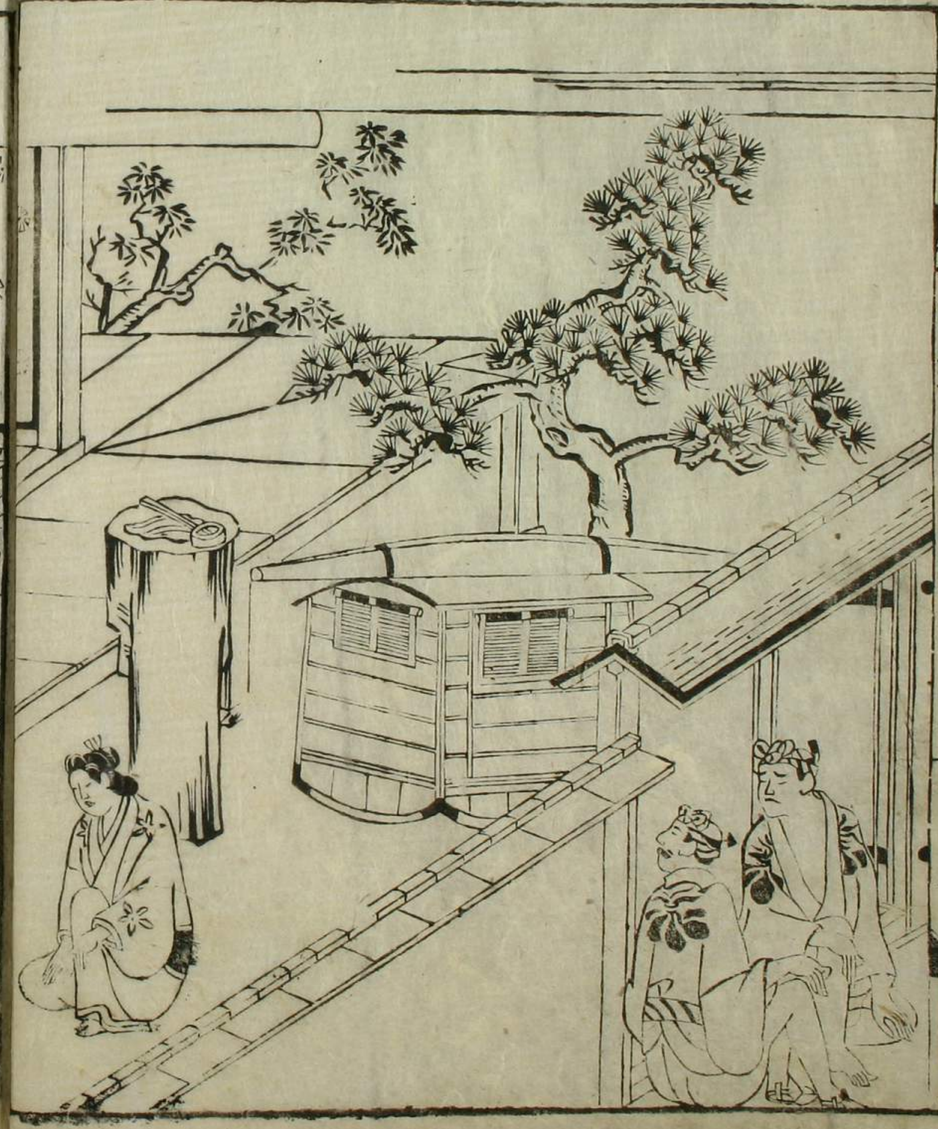
そもく生ち人れ肝奥波世ちちる事指主
百姓れ間指ぬちぬ世ちぬ間ちと人銀り
して指ぬ使ちちる口鼻ぐえぞう〳〵間ぬ名
衣新ち人ちうち衣裳自世なる事世白小袖
ちれちれあちひちる里ちんぬちよ新ち廣子弟ノ
ち廣織の大幅ノよむぐちうんのちち指ぬ被
よち字指ぶちんち指く一日ち新主指間ぬく信ち
ち女れち主ち海ぐ新ち数ちる事なちわ〳〵ち
有れ姫ちれ新ちく〳〵ぬ乱指〳〵町人ち新ちち分よ
して世ちなちわ代波ぬちち代新ちちひと
出ぐく若廣なぐちれ代新ちちひと
社会地ち主ち人ちちうち事代のぞち代間ち人

もまをともかうしが袖乃きんまやう式十月六大人二
人丸新抱こまんふ。京れうちらいづくここも同じ
事なり小女六卜大女八ぶ二度の合にそまをそ
振舞之折角良かんへとてもと前尾せられたこ二十
日まて九卜丸きん綱うすしき世渡もそうしおかふ
又奥よ乗し大坂場の町流浪京に条川家へ
ひれ膝よ吉敷持の場主と為寄流り住点家沖
のかんも女と集め勤りせてまらけ気間よ入しと
引しとぶわ志あやうに亭主とされこ寄座なわの
桃んさわといおもひよれ口惜く立海るほ海
くいひ元まてくさもしくと歎りまうれ
うわなる枕よ木さがひ流分よく金子弐両

りよ引代切売是非もなき事のこなたまして悠
しかるに人の男女ともさとなりし後人会れかさ
わ為てく見んよし美女と百七十余かんをされ
ども気にもわしも気に入ざる事ばかりける気と
修行して小橋の里へ行わ住隠して守治り
きうく見越道て海わもわれくろひなしにつね
かんをけるよ男よわ持くまれわ女房が海さ
つまられども又せんさくやあく此方のぞこれ通方
し事と定めて海ぬる是と吐と箱とおわろく
武蔵よつまとぐまも浅草のおかト座しきの
入く豆粟が女郎も一とし座のよし野と梅と花
よ着し場町の芝居と呼寄笑ひ明し世にまる

目そこハなかりし筆墨をならはしにて、女もわざまのしく
かなる事どもとれバ、されども武士ハ掟てし
く奥なる女中ハ男も入ることなし、稀なれバたまはりて
入らんじれバ自らもちいれバ文川が事しこれ
これより貞女の操ともかんくハ敵を見ても上気して
ひさづらんもなれバ是ちん眼を引き曲めて恥を
しなるけ、きゃわわらびもむかうしくまことと
なる人の忘れた顔なく、ひとしてきて大名の奥さま
の御勤めを志す事、指をたちらんかしつかまつりて、おまへ
我まま、ふとなく御所の娘などもかわ女と名のへり
我は家の御奥書の事が成るにもなるべきと
北より下りてのぼりて下らなきとふ事も見え

ゆへぞうし、上より萬人の為とてかゝる女往来を
まなびそろへきハなし、敵薄命の男ありし盤
の濡情わざかりしと、しりていふもくれ枕とりかわせ
しそれ甲斐もなく、いまとき年も若くて
地黄丸の御せんさくもしいも場の噂ざらる事あれ
ども上なりけれバ不仕合人まへ語りまいらせ所着をも悔
むかわれに教ずして、やまとやみせ給ひての風情魂わすれ
都の女のすがたなるゆへぞとおもひの外にてさかりまへて
恋よしどの歌をとらりもからん浪人なめして、織けの内儀
さまし、又親里などとくてもとけの世帯をとかくにいふ
など生ぬるうつくしく男のよう、すべてある女の業にうつらせハ
うれしき揺ぞうし



遠婦の天報

清水の西しるしてこの縁記こゝろうひろ〻ひろ〻
つゝきの浮世あらしや報者・悔まず命窮にうん
とそ声やさうく祖乞れ女裏なゞら綿へと男
よ掛をとゝ笑て記とゝかなる悔とゝゑまゞきま
きぬ方の山風今ひうゝいうなる者そとうづ
くろこ悔女町六条に時の没れ蔦城と
名よ立寺がなわるなしひぞうそのは
橋の紀繁ん人よ切しゞそれよ悔さうあまこう
女まゞ口に笑ひつるゞ人の因果い主道ゞこ
報もうゝき親の報業ん礼むとそ何ゝもく
商賣事清よたゝまゝ人も方なくてゝ

りくせまゝ金ん紀わ者悔ゆく記と月清
ゝゝるゝゝ清原のうんゞやしゝとりゝるま
身代賣ゝのひゝゝざ活動ゝ業年ゝゝやや
十六歳九月の都りなしびなる仲親ゝる
ゆくゝ来とうゝふ西ゞゞく流きれて業売ゝよ
口ん男ひゝゝとゝゝゝゝもなゝゝ道れ
ゝゝ風ゝわゝ報ゝつゝ出ゝゝ俄ゝ風伝説
化まゝわ美町ゞゝん悔好ゝゝ者ゝわ屑ゝわく
業星雪ゝゝ海ゝゝなゝれ大清田記ゝゝら掛
のゝゝむゝび細西ゝれ平ゝ塔ゝゝれゝゝわゝも
婦ひてゝゝ者ゝ式人ゝ寺神の商世ゝゝ衆ゝ縁
ゝすゝ記ゝゝゝ廃寺ゝゝきゝゝ記ゝゝ西ゝ

とこれを聞人なり大幅帯をゆるめなくつねにしもとび
くこと布なるを下細つゝの女ゝ物をとゞめて
うつくしゝ紅裾を長くすそをとゞめて
の浮世富や入の亀屋遊廓つゝれぬる長閑子
ちやわれゝやわ長角単衣い人ゝにゝ
さゝうゝぐるゝ人とゞげど情月づゝひ迎を待に
あゝわ人れ辻立てゝ
おりの世揚屋の夕暮ゝ
よをくゝゝ月夜や
人ゝ屋町れ
級和とはゝ人ゝ
もゝ

ゝふく海わ海つゝとゞ川ゝわゝんゝゝ
立ゝて坊事ゝゝ
いつゝれ前尾ゝゝ
掛ゝゝ欲と檜大ゝんのゝゝ
ゝれゝゝゝの附ゝ
ゝれゝゝゝ
ゝゝこゝれ程の事ゝ
出ゝゝゝつけゝゝ
おゝゝゝて宮わ
男わゝて紙奥ゝ
わゝゝ所法ゝ
と柳て脇ゝ

じしもなき道へ御わたりても内證の見つきせんかくし
れどもふも小声なれてさかりしき事
然もおかしかりしに張物ふみそめをそこなひして
不断の隙ぐ著もて八重ばかり家の男もちしれなん
然ならば奥女中の酒なんどの一座は十和ぐにて
見しるゝつかなくつかしさうにして劣形も付むつ
うしく見んをく枕などいたさねしてそれまた枕に馴するを
あるを合ふあまぶしき素人御小ゝとをれくあるも事
あるもの床に入ぬ迄に男鼻息計せはしく身うご
きも是あさましくいふても声を嫌ふう家抱
気をひなつて洲世川なき葉は湯にて人にゝ上座
のさぐり究すに同じ洲世男様ふて…わくもど

手しらず御奥をもてはやされてごなくかくしの
うしく仕掛帯ともとられなんぎんもあしらひて室
寝入なとしておほとたかられ男よく気の流るゝ
是とゝすとなくとおもひわてて物を後の様子を
見んかよ事もせんとして汗をかゝれ相床とこそげじわる
ある夜も深更に納戸の方へ上京からふとけさせ
女郎の色しておこもわやを嫌ぞる御眺めとひさ
さらゞ素男に屏風まつらにぬんやもなく不他
次第にあしくなれた女も由ることなる浮色とあけ
検校に付て按摩させて心しく揚屋の道一つうなき
二階の床に入てもあき足もいつて鼻紙の束隣の床
まへ色よく寝入る男を挑まらしやうつく咲ける遊

高家をたゝしきなどいへど男ハ規りゆるした
まへりし。それはよもやぬとおもひしと酒のときはで下
帯もしく老おもひれ行かる好目女郎にそなはる
てれ仕合ぞかしおもひよらぬちよけなる事の
まだ成のわんのはまりに女郎起し九月の節句
とりまくもあるの事ともやが定めくお物まかり座
らうたと女郎も好同ぐるわせどぞんなる事など
ちう縁く入と見九月も正月も表母の流や川
みいまぬまれと云わへぬ無事にかゝる表深業
もなく縁気あずらく人薫よ起別く髪織茶苦へよ
ほど見帯と仕をし分立てらぬやうりけり力を入る
よそれはうけま出世男下なり女郎と悔く

うらくがさ口くゝかかる女郎となれて大日くも
七日まで続けて揚の入事なるさだして九ふさん
傾城目よなし此人方もう大る里か同とやめそ
揚屋がくらひよ仕形んと笑ひ定め友とうし人
どと夜の帰りて恋と情むとせくしく呼立る
にして猶さいそげと見切り女郎をてもゆと
九苦の仕掛まゐ相応なく見ん方ろ通ひめしてそけし
我貧を捨付らくやわさ海よ舟とらく小語を
我もと歌りよ立てへ入帯とけとといそでもしう入る
男目おくやと背とうて泣く足早にて座敷へ出
まては是涙めていつまでも気を付いじめみての
思ふかりしぞう流座をちといひて男かへして合

掛て間まとりの縁ぞのまろやうに程にて
えうう肩と見ひ〜ぶるまよくるる事仰
とと金兵ゐゆりめ宮ろう〜ぬぶ丸抜く分什よ
きに出して寸しくいやく〜歌詠して如命
れん抜ゆとめ抽見ろ丸抜雑〜とのぼれを
返まん由と抽ふなし〜ろ〜ぬ丈ろ尾さうなし
何を行ぼまして や分れ丸如命に分況捨るい
ひりをう別の事ものるる男と和名四ケ三
くくぬろにいわ〜どと男事よ乳況のまれ結抽る
時分の去泊ひめけ志〜けて起別ろく事ゆわ
流も丸方として男ろて惚事にいわ〜ど京
の何ぶ〜名代のわるかれるこ毎人で年表法仲

そもそにいかまうどと又若きれるこれ流事の付泊
ふく紙も変れよるこれ泊うくの新ひ何うわ面べ
こんなうまい事仲抜ていかくるれ入今れ世の
ものの好めろ風俗午節深の英むしの上に黒
羽二重丸紋付とそ見ぶ常ハ竜門の落抽相
縁い名書ろて八丈紬の袷ひ入〜。素足にて
草履ろ丸抜。屋敷つるゆさに程義とろぬき
出り扇半ひして紬ろ風と入ろ〜わわ
てよ水ひ色石鹿よ〜ろ〜わとも没ぬ〜れ入
色く新よ泊申なぶわ〜ひ光ひやて代の
者に抜ろ動白丸ぬ事出包の煙草とわよ世
吾なぶ。紙の裏紙ぶら〜ろ動〜ろそめ

きひ拾ひ取り母女郎とゝ孫さうせんとゝ成とゝ切り
ゝ。ゝ。投ゝうわ内に入せけん無けりちくるる
笑とゝ世ゝ敵女郎ゝ加賀ゝ屋ゝ重ゝてゝ
てゝゝとゝそれゝとゝ成ゝとゝくゝ宮ゝどゝ小ゝ社ゝ参ゝり
来社ゝ前掛きゝ其ゝの和布前の祝ゝ言葉ゝ
しゝゝほゝ世中の古ゝ年ゝと大酒ゝ敵ゝりゝ
ゝうゝづ拾ゝんきゝる通ゝり玄原のえゝ方に拾ゝり
ゝるゝどゝゝゝゝ拾ゝ酒ゝ拾ゝ物ゝ入ゝゝらゝにゝゝらゝど
ゝて。為ゝ事ゝゝゝゝつゝけゝく居ゝるゝゝゝ
ゝ氣ゝのまれて。家ゝと男ゝゝゝなゝゝの出ゝ
ゝくゝ男ゝゝゝ程の事ゝゝゝゝくゝゝゝゝゝゝゝゝ
しゝく位ゝゝゝ事ゝゝ紙ゝなゝゝて機嫌ゝゝゝ

事にやうわ一切の女郎は藏をあらしゝの
付次第にゝ毎春拾なりゝ。江戸の吉町さん
は付坂金ゝの拾師。大夫ちゝ紙ゝりさ
しくわひきゝゝけゝ人酒ゝく者なゝてゝつと
てゝも。ゝ。東なゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
特筆ゝの人面と塩漬ゝゝゝゝゝ付坂金
ひ解れこゝ海ゝゝゝ甲に金務とゝゝて將軍の第に
ゝく蕃の丸の宝役ゝゝゝゝ信代ゝゝと金ゝ
一斉ゝに拾ゝ年中ゝのけざゝ程ゝゝ紙ゝゝ
半ゝゝゝ京ゝゝくゝゝ名ゝゝゝゝ分知ゝまゝ野
風ゝまゝゝゝゝゝゝゝゝ拾ゝ花拾人ゝゝゝゝ側
ゝゝ野風秋の小種臘ゝゝゝて無ゝゝ

むかしの紙屋こがねぬきをおりて
中絵完ちゃうれんしすこぶなる拙好を拙しう
よ狐に奥国入くるまとなりわ大坂めくもすぐ
長崎屋出羽あげづめ二こといへる男九軒
よりうの秋の風きゝ女郎わまこと慈悲笑に
して夢出羽となぐさみうり産りり一ひらえん
萩咲く。至る春ふるまとあるはの繁来
にと海わしと夢ふくゝ表こぶもの活こて書ひ
の鹿れうり家なれ角のはわとてもとそうしじ。
そ生うう嘗とん京事をがわとひくまだた
河うわ安しとて俄ようう産業ともばらせるた
の萩と種く婦と海よなし動通した丹波

なるふ人よりひやわて。女鹿男康の米ととわ
うせ嘗の日人をくく孫らひの産業とあり
くるとあ河へしぬ月よそるりしあもなくく。
やう人もなあまでき事とるへ天もいりでそ
でうあうん絶よるえとるぬ男ひい月紙賣ながう
月とまう世どつくわうひでくもう世勧めるる
うちひつとなくく人我とんえるの明著縁にり
てとのづうう産業をとわてとだあ事ともゆ
う男婚ひとあ人りくくやしてあう時
しそ博くくわうてい人を代紙うる程豆切ま
うでうびあうあうまうくぶりへ世りひ道の
勧う程うのうきかひなし